

## ハワイの桜と新一世の女性たち

影山穂波\*

Cherry Blossoms and *Shin-Issei* Women in Hawaii

Honami KAGEYAMA

### 1. 日本人にとっての桜と海外への植樹

例年3月も半ばを過ぎると、日本のメディアでは桜の開花情報が毎日流され、春の訪れを人々が共有するようになる。多くの小中学校をはじめ公的な空間には桜が植樹されており、日常生活のなかでも桜は身近な存在となる。

ねがはくは 花のもとにて  
春死しなむ その如月の  
望月のころ

西行法師『新古今和歌集』

西行の詠んだ歌であり、「花」は「桜」のことである。西行が「桜を詠んだ歌は二百首以上あり(中略)、松や梅を詠んだのは二〇～三〇首あまりにすぎない。それほどに桜を好んだ」と丸谷(2010)が指摘するように、日本人は桜を身近なものとしている。そして「花」といえば「桜」というほどに満開の桜は日本を代表する景観ととらえられている。

花見の始まりは、風雅をこよなく愛した平安貴族の宴が初めてだといわれている(品川1994)。やがて貴族が衰退し、武士が台頭すると、「貴族の花」であった桜は、「上流の文化として各地へ拡散していく」(品川1994)。鎌倉時代の戦いで政治力を得た武士たちの時代になると、平安貴族の雅は力を持つ武士や財力のある町人たちによって踏襲されることとなる。桃山時代になると桜の宴は、いっそう大衆のものに変貌する。江戸幕府が開かれ、新しい都市の各所に桜が植樹された。これが結果的には庶民の共有物となり、元禄時代になると、桜の宴は庶民の風俗として定着した(品川1994)。近世には「庶民の花」、「女性の花」となっていた(高木2006)のである。

その後、「花は桜木、人は武士」の桜観が広がり、明治時代に入り国民皆兵が始まると「花付きが多く、花期が短い、ソメイヨシノは(中略)軍国の花として国策の一環に組み込まれて賞揚される」(品川1994)ようになる。「軍国」「美談」や「玉碎」というような表現

---

\* 国際コミュニケーション学部 表現文化学科

の操作も戦死を美化する戦略として利用されたが、桜の花は、この過程においてとりわけ重要な役割を演じた」(大貫2003)のである。

明治時代、広島や山口、熊本をはじめとした各地域から官約移民としてハワイに移住し、その後現地に根を下ろした人々にとって、日本的なるものは孝行、恩、我慢、頑張り、仕方がない、忠義、責任、恥、誇り、名誉、義理、犠牲などといった言葉で受け継がれていく。これらの言葉はJapanese Cultural Center of Hawaiiのギャラリー入り口に石碑として刻まれている。ハワイにおける日本人にとって、桜はこれらの考え方を表象するもののひとつとなっており、日本においては近代国家を形成させるために利用されていった。

斎藤(1980)は「日本人にとってサクラは何であったか」と問題提起をしており、「国民性＝民族性に根差したものである、とか、日本人の桜に対する接し方は国民的教養の源泉であり日本美の標準である」などという言説からその疑念を検討している。彼はアメリカの桜を事例に「サクラの美しいのは、自然のしわざではなくして人間のしわざのゆえであり、風土や気候のしわざではなくして社会のしわざおよび人間の意志のしわざである」と指摘し、桜をめぐる人々の考え方にも言及する。そして「桜が日本の心だの、民族性だのいいつつも、桜の咲く季節にのみ関心を持ち、その他の時期には知らん顔を決め込むその姿勢」に問題を提起している。桜は利用できるものとして象徴的な意味を付与されながらも、必ずしも樹木そのものではなく花とそのあり様のみが価値づけられているといえよう。

そこで本研究では、日本から移住しハワイに渡った先で、桜を植樹し育てようとしている活動に焦点を当て、こうした活動が果たす役割を明らかにする。「さまざまのこ思い出す桜かな」と松尾芭蕉が故郷に戻って句を詠んだように、時代や場所に依拠して、日本人は、桜に感情をのせてきた。桜にのせる思いは、日本人のみならず日系人の心に文化として埋め込まれている。桜の存在が、ハワイに居住する日系人・日本人にとってどのような空間形成に寄与することになっているのか、その背景と現状、今後の課題について検討する。

これまで、ハワイにおける戦後移住の日本人の「居住空間」を、国際移動とジェンダーの視点から明らかにしてきた(影山2010a, 2010bなど)。本研究は日本に望郷の念をいだく「桜」を発見し、その植樹運動を展開することで、いかに人々が「居住空間」を形成しているのかを検討することにつながるものである。調査にあたり、2016年2月から2017年8月にかけて、オアフ島ワヒアワ地区に関してはJさん、Tさん、オアフ島への植樹運動に関してはSさん、Nさんを中心に話を伺った。関連するイベントにも出席させてもらうことができ、そこでお会いした方からの話も聞いている。今回の調査では、植樹活動の中心的人物よりもむしろ、活動を支える立場にいた女性たちに注目することで、多くの住民の立場からハワイにおける桜の意義を考える。

## 2. ハワイの桜

### (1) ハワイにおける桜イベント

ハワイは年中温暖な気候であり、桜の植樹に適した土地とは言えない。そのため「桜」という存在に対しては、実際の桜よりもむしろ日系人の一つの象徴として祭りの形で普及

してきた。2017年に第65回を迎えた桜まつり（Cherry Blossom Festival）は1953年に第1回が行われている。1949年にロサンゼルスの日系イベントを見た、当時のホノルル日系人青年会議所副会長が、ハワイでも同様のお祭りを開催しようと尽力して始まったものである（online: cbfhawaii.com）。中心的なイベントは桜まつりの女王の選出で、ホノルル日系人青年会議所が主催している。日系の血を50%以上引いていることが出場条件であり、美しさだけではなく、知性、日本に関する見識が求められる。ほかにも日本をイメージするイベントとして、歌舞伎の公演、生け花、ファッションショーなどが行われている。現在は、民族を超えたイベントを目指しているが、一方で、桜まつりを通して日系人アイデンティティを共有する役割をはたしているのである。

実際の桜の花を愛でるイベントは、1993年にハワイ島ワイメアではじまった。ハワイは熱帯気候に位置するが、ハワイ島だけは標高4205mのマウナケア山のように高山ツンドラ気候を含む地域が存在し、寒暖の差の大きい場所がある。冬季に寒くなることから、ハワイの中で桜の花を見ることが出来る地域のひとつである。その場所で満開の桜を見た一人の日系人が、ハワイ公園局長であったジョージ・ヨシダや周囲の人を巻き込んでしまったのがこのフェスティバルである。ヨシダは「自分たちだけではできなかった。地域の協力があったからこそだ」と当時を回想している（North Hawaii News 2012/2/2）。

桜をめぐり、一人の日系人の思いではじまった活動が長期にわたるフェスティバルへと展開されてきた。自分たちの場所で「桜」を楽しむために空間を形成している活動となっているのである。

## (2) オアフ島への植樹

ハワイへの桜の植樹に関する記録の一つが、1953年に『ハワイ報知新聞』<sup>1)</sup>の創業者であるフレッド牧野の死を悼み、妻が寒緋桜を植えたというものである（North Hawaii News 2012/2/2）。オアフ島への植樹は1950年代に行われたのではないかと、オアフ島ワヒアワ地区で桜を育てているTさんは語っており、この時期にオアフ島で桜がみられるようになったと考えられる。しかし降雪があり寒暖の差もあるハワイ島とは異なり、オアフ島での桜の生育は難しい（Jさん）。そこで、ワヒアワ日系人協会の会長で、ワヒアワ地区で桜を育てているJさんと、妻のTさん、さらにこの地区で日本桜の植樹を試みるために尽力しているSさんに、オアフ島の桜について2017年7月に聞き取り調査を実施した。JさんとTさんには面談がかなわず、電話でのインタビューであったが、1時間以上にわたり話を聞くことができた。

オアフ島の中部に位置するワヒアワ地区は、高台に位置し、12月ごろには気温が下がるため冬といえる気候を感じることで出来る、オアフで数少ない場所である（Jさん）。1980年代前半にはこの地域に沖縄桜が植樹され、1985年には移住開始100年を記念して、常陸宮により地域の高校に桜が植えられた。幾度かの植樹の結果、ワヒアワ地区のカリフォルニア・アベニューの周辺で、沖縄で開花する沖縄桜、中国南部から台湾にかけて開花する寒緋桜など、色が濃く、数週間の長期にわたって花を咲かせる桜を見ることが出来るようになったのである。これらは、ある程度暑い気候にも強く、ハワイでも寒冷な時期を過ごすことができれば、開花がみられる種類だという。

Jさんは調査にあたり、「桜に興味があったわけではない」と話をはじめた。妻の父が桜

を大切に育てており、それを受け継いだ。オアフ島のなかで桜の開花が期待できる場所は多くはなく、気温とともに降雨も必要で、結局、「桜が自然に育つ場所でない」と難しい（Jさん）という。しかも害虫や菌がつくのを防ぎ、枝が重なり合っているところは剪定も必要のため、毎年10月には「あまり切りたくないけど」対応している。種から育てるのは難しいが、3ヶ月冷蔵庫に入れることで冬を体験させ発芽の改善に努めたり、苗のふちに水をまいて冬に見たてて育てたりしたこともある。桜の開花に最も必要なことが寒さであるため、疑似体験させることで桜を育成しているのである。

この地域では、一般家庭の庭に桜が植樹されていることが特徴の一つとなっているが、公園や学校にもまとまって植えられている。公的機関で育てられているものに関しては、基本的にそれぞれの機関が管理するが、年に2回、高校で日本語教育を受けている生徒や、ワヒアワ日系人協会のメンバーを中心に栄養剤や肥料をやり、多くの人を巻き込んで世話をしている。

例年1月半ばから2月にかけて沖縄桜が満開を迎える。それに合わせて、ワヒアワでも桜祭りが開催されており、2017年には29回を数えている。以前は隔年で行われていたが、現在では毎年の開催となっている。2017年のフェスティバルでは、入場料は5ドルで、そのお金で肥料等を工面した。2004年からはワイキキからトロリーバスを運び、そのトロリーバスで桜を見て回るツアーが開催されている。トロリーバス乗車の前後の時間を利用してお弁当を食べたり、カラオケをしたりして、花見を楽しんでいる（Jさん）。ワイメアで花見をするというのは、トロリーバスで楽しむだけではなく、車で来て、立ち止まって花を眺め、花木を育てている家人や花見客と話をして楽しむということである。ゴザを広げて食べたり、飲んだりという日本的なスタイルとは異なっている。沖縄桜は「ポツポツと咲き、一度にバツと咲いたりしないので、風習も違うし楽しみ方も違う」とJさんという。2017年のフェスティバルでは230人ほどの参加があった。ワヒアワ日系人協会の基金や広告収入などで運営している。

現在、ワヒアワ日系人協会のメンバーは40～50人ほどだが高齢化が進んでいる。フェスティバルの運営を指揮する人たちも高齢化しており、将来の担い手の確保など、今後の継続には課題も生じている。しかし毎年、フェスティバルが終わると新たなファンや応援者が増えていく。そして「またやりましょう」となっていて続いている（Jさん）。

Jさんは「桜の花を見るのも多少好きだから、necessityで」活動しており、「みなさんにサービス」しているのだと語った。しかし「necessity」や「サービス」といった言葉よりも、公園や社寺・学校などに植えられた桜を守っていこうとするJさんの姿勢が、地域の人々を巻き込み、まとめる力となっている。すなわち桜の状況を観察し、改善するために試みを重ね、開花したらともに楽しむという地域の人々の姿勢が、この地域の桜を維持・発展させ、そうした活動からコミュニティが形成されてきたのである。

Sさんは、カリフォルニア・アベニューには13の宗教施設が林立しており、ギネス記録になった通りだと紹介してくれた。Sさんはまた「神聖な気持ちになれる場所で桜が見られること」を強調していた。個人の庭でそれぞれに桜を育てている地域だが、各家庭を超えて地域全体で、多様な宗教が林立するなかで、それぞれの宗教的バックグラウンドも超えて、桜によってつながりフェスティバルを開催していく力こそが「居住空間」の形成に寄与しているのである。

### 3. オアフに日本桜を

#### (1) ワシントン桜寄贈100周年事業

1912年に日本からワシントンに桜が植樹されてから100年後の2012年、「桜寄贈100周年事業」日米交流が行われた。ワシントンからアメリカ各50州に桜を植えるプロジェクトで、ワシントンのポトマック川沿いの桜並木と同じように、日本桜の名所を作ろうという事業である（Hawaii pacific Press 2011/12/1）。

熱帯気候で冬をもたないハワイにおいては、ワシントンから送られる桜を育てることは困難である。そこでこの事業に呼応して、日本からハワイに桜を送るプロジェクトが始動した。このプロジェクトの中心となったのが小山鐵夫博士であった（Koyama 2013）。高知の牧野植物園名誉園長である小山博士がハワイに育つ桜を選定した結果、2011年10月に牧野植物園からハワイ州にセンダイヤという山桜の種子が送られることとなった。ハワイ州の農務局の実験圃場でその種子は苗木に育てられた（牧野植物園だより2013 No.55）。2012年2月14日のハワイ島ワイメアの桜祭りでは、1912年のワシントンへの植樹記念100年イベントの一つとして、5本のセンダイヤ桜が植樹された。当時の日本総領事も参加してこの式典の後、多くの植樹依頼が来たという。2013年7月にはオオシマザクラの種子も牧野植物園から送られた（牧野植物園だより2013 No.55）。

そもそもアメリカにおいて日本からの樹木、種苗の輸入は困難である。その理由の一つは、特に実を付ける種が在来種を脅かす可能性があるためである。アメリカの農作物を守るため、桜も輸入制限がかけられている。しかしこのときは、「桜寄贈100周年事業」という大義名分のもとで、当時のハワイ州知事が連邦政府農務局に掛け合い、例外的に輸入が許可された。牧野植物園の立地する高知は日本の山桜の南限でもあり、ここで育つセンダイヤ桜であればハワイでも育つだろうと、何千個もの種が輸入された。この種子は苗として育ち、現在はハワイ州農務局、ハワイ大学を中心にオアフ島で管理されている。

桜寄贈100周年事業による植樹を機会に、日系人の会合などでも日本桜が紹介され、植樹に関する意識が高まることとなった。賛同者も増え、その結果2012年に桜並木委員会が設立された。

#### (2) ハワイ桜並木委員会（Cherry Alley Tree Committee）

ワシントンのポトマック川沿いの桜のように、並木を作って桜を楽しむことのできる場所を作ろうという桜寄贈100周年の事業に呼応して、ハワイでも実現させようという意識が高揚した。このことは、この場所で日本桜を開花させることができるかもしれないという期待と関係している。ハワイ島でのセンダイヤ桜植樹から半年後の2012年8月、桜の苗木を植樹して桜並木を作る計画のため、当時のハワイ州農務長官ラッセル・コクブンを委員長に、日本の総領事館名誉総領事のアーサー・タニグチ、前ハワイ郡長のビリー・ケノイ、小山鐵夫博士、ハワイ大学の関係者を含め8名からなる桜並木委員会が結成された（牧野植物園だより2013 No.55）。

種苗の管理と桜並木を作るための場所の選定などが検討されたが、現実化させることは困難であった。関連部局の責任者が集まってはいたものの、桜は広い場所を必要とするうえ、気候条件に制限があり、土地所有者の意向もある。植樹依頼があっても生育が悪かつ

たり、植樹場所が見つからなかったり、課題は多かった。苗の管理の問題もあったが、ハワイ島だけでなく、オアフ島にも植樹を検討しようという動きが生じ、オアフ小委員会が形成されることとなった。

オアフ小委員会では、日本桜の開花可能な地域をさぐり、植樹ができる場所を探す活動が開始された。オアフ島のなかでは沖縄桜の咲いているワヒアワ地区に注目して、日本桜を植えてみる試みがなされた。カリフォルニア・アベニューはオアフ島で一番寒いところであったため、試験的に個人的なつながりを駆使して5~6軒に頼み、近隣の日系企業にも依頼して植えてみた。オアフ小委員会の会員であるSさんは、オアフ島で「サクラを見たい人はたくさんいる」はずだし、多くの宗教施設がある地区だからこそ「平和を願って」桜を咲かすことに意味があり、「花を見てけんかすることはない」はずだと、尽力していた。その結果、翌年の2013年には、いくつかの場所で数輪の花を咲かせた。すでに日本桜を育てた経験のあったJさんの場合は、ここではセンダイヤ桜は育たないだろうとオオシマザクラだけを試すことにした。オオシマザクラはたとえ花が咲かなくても、葉を食用に利用できると考えた（Jさん）。このオオシマザクラも数本が花を付けた。試みが続けられたが、ワヒアワ地区には十分な広さが確保できず、桜を植樹できる場所がなかなか見つからなかった。並木を形成したいというこの桜プロジェクトの植樹選定は困難を極めた。

こうした活動とあわせて、日本桜に関する知識を共有し、植樹への意識を高め、協力を求めるために、小山博士を招いて主婦ソサエティや木曜午餐会といった日本人・日系人が中心となったネットワークで、講演会が開催された。日本桜がオアフ島でも見られるかもしれないという小山博士の話に、参加者たちは目を輝かせて耳を傾けていた（主婦ソサエティ主催の植物参観会にて2012/2/18）。

意欲的なオアフ小委員会の活動に対し、ホノルル市議会議員であり、主婦ソサエティの代表を務めた経験もあるアン・コバヤシが植樹を受け入れてくれる場所を見つけてきた。10エーカーの広さのあるヘレmano・プランテーションである。委員会が当初目指していた並木を作るための植樹ではなかったが、交通法の問題もあり、道路沿いではなくこの場所での植樹が実現することとなった。

### (3) ヘレmano・プランテーションへの植樹

アン・コバヤシの紹介で日本桜を植樹することになったヘレmano・プランテーションは、有名な観光地であるドール・プランテーションの隣に位置し、知的障がい者の訓練や雇用を提供している非営利団体である。道路や公共の広場で植樹する場所の選定が困難となっていたなか、公共事業を行うヘレmano・プランテーションが引き受けてくれることとなり、植樹式は一大イベントとなった。

2016年2月、ロータリークラブなどの援助も得て、センダイヤ桜12本の植樹式が行われた。はじめは100本を植樹する予定だったが、苗の不足その他の理由で、12本での植樹の式典となった。ヘレmano・プランテーション側は、花見のできる場所ができると期待していたのだが、2016年8月の段階で、これ以上の桜は受け入れていない。桜の木の世話は想像以上に手がかかり、また開花まで時間がかかることが理由と考えられる（委員会記録2016年8月6日）。桜の育成は容易ではない。野豚に芽を食べられないように囲いをし、水の世話もしなければならない。本来のヘレmano・プランテーションでの業務に加えて桜

の世話をすることは、仕事の増加を意味している。また満開の桜が咲くまでには10年近くを要すると考えられる。それまで人を惹きつける場所として認識される可能性は低い。植樹により観光地の一つとなることを考えていたが、満開の桜がみられるまでに時間がかかることが負担となっていたと推測される。桜並木委員の一人はこの事態に対して、縮小されることになった無念は「日本人でないといけない」という気分になったと語った。

2016年8月の段階で桜の苗木はハワイ大学のハワイ島コナ実験圃場に約130本、オアフ島ポアモフ実験圃場に24本あった。こうした苗木をどのように植樹していくのかが桜並木委員会の課題となっている。ただしその後オアフで約20本の受け入れ地を見つけており、桜がつなぐ縁を広げている。

#### (4) キャンプ・スミスへの植樹

キャンプ・スミスはアメリカ太平洋艦隊の中核基地である。ハワイに位置するこの場所は太平洋、アジア、中東を見据える拠点となっており、軍事上の意義も大きい。その場所に桜を植える話が2016年に浮上した。当初キャンプ・スミス側は、日本桜の話に関心を持ち、前向きに検討すると答えたのだが、その後数か月連絡はなくなってしまった。桜並木委員会オアフ小委員会のメンバーは、結果が分からないままに時を過ごしていたが、11月に入り正式に植樹許可がおりた。そして植樹のためのイベントが可能であると通知が来たのは6日前のことであった。その結果、2016年11月10日にキャンプ・スミスに日本桜が植樹された。その状況を新聞では「日本とハワイの日米友好の証」と紹介している（The Hawaii Houch 2016/11/18, Hawaii Pacific Press 2016/12/1, 高知新聞2016/12/22）。参加者は太平洋司令部長官、幕僚長、日本国総領事、小山博士、桜並木委員会オアフ小委員会委員長などで一大イベントとして執り行われることとなった。

2017年現在、太平洋司令部の長官を務めているのはハリー・ハリスである。彼の母親は日本人で、戦後GHQの軍人として日本に来ていた父と結婚した、いわゆる「戦争花嫁」であった。直接的にこのことは今回の桜の植樹イベントと関係があるわけではない。しかしこの植樹に尽力してきたSさんにとって、このことは大きな意味を持つ。彼女が時々世話をしている年配の日本人のなかには「戦争花嫁」としてハワイにわたってきた人が少なくない。「戦争花嫁」のなかには日本へ毎年のように渡航する人もいるが、なかには、日本にいた親類との関係を断絶してしまった人もいる。いずれにしても、3月末から4月にかけて、桜のタイミングに合わせて日本に帰国することは容易ではない。そんな日本人の女性たちに沖縄桜ではなく、薄墨の日本桜を見せてあげたいというのが彼女の願いである。植樹の活動に積極的にに関わり、キャンプ・スミスへの植樹の話が出たときにSさんが考えたことは、これこそが草の根レベルでの日米の交流に「つながる」ということであった。キャンプ・スミスへの植樹の際にハリスに送った手紙には、「キャンプ・スミスという重要かつ美しい場所へ桜を植樹する機会を与えていただきどうもありがとうございます」とつづっている。さらに彼女は、「母として、妻として、女として、私たちは誰よりも「平和とハーモニー」を愛します。真珠湾を含む太平洋を見渡すことのできる美しいキャンプ・スミスにはためくアメリカ国旗の横に「桜」の木が植えられることにより日米の友好が末永く続くことを願います」と続けている。女性の立場からのこの文面は、一枚の手紙に過ぎないが、植樹活動を展開する彼女たちの真の欲求であり、桜が意味する平和への希求の

表象にもなっているのである。

2016年12月には安倍晋三首相がハワイを訪問し、バラク・オバマ前大統領と面会したのちパールハーバーを慰問するという歴史的出来事が生じた。政治的な日米友好に意味があったと考えられるが、その1月前にキャンプ・スミスに日本の桜を植樹するという文化的な日米友好が行われていたのである。

#### (5) 今後の課題

ハワイ桜並木委員会を中心に、オアフ小委員会でも積極的な活動の下で桜の植樹を進めてきた。2017年8月には、新たに桜を発展させる会が非営利団体ハワイサクラ基金として設立された。第一の目的は、ハワイ桜並木委員会に入金されている予算を移し、非営利団体として制約のない形で発展的に利用していくことにある。第二の目的は、2012年の「桜寄贈100周年事業」以来の展開とは異なる活動を進めることができるようにすることである。第三は、活動に対して温度差のある委員のなかで、積極的にかかわってくれる人を中心に活動できる体制を作ることである。これはボランティアによる活動であり、それぞれが役割を果たすことが求められているのである。

2016年8月のハワイ桜並木委員会の会議において、今後の発展のためにも日本から桜の育成を確認し、的確なアドバイスを受けるために、桜守を呼ぼうという試みが検討された。植樹された桜の管理と、ハワイ大学農学部の実験圃場に預けられている桜の苗木の利用を考えるためにも、桜守が必要とされている。そこで日本の桜委員会にも協力を要請し、政府に補助金をもらうために努力したが、そのお金を得ることはできなかった。また、ハワイ州に対しても依頼をしたが、基金を得るのは難しい状況であった。そうした対応を目の当たりにしたSさんは、「桜の植樹でいったん終わってしまったのよね。次は花が咲かないとみんな振り向かない」と語った。小山博士の尽力もあり、結局ハワイサクラ基金の事業として、2017年11月から12月にかけて牧野植物園から桜守を招くことが決まった。

新たなプロジェクトとして、愛媛の陽光桜を持ち込む活動にも着手している。2015年に映画『陽光桜』で取り上げられたこの品種は、開花までの時間が早く、どんなところでも咲くようにと品種改良されたものである。この種の植樹が、今後展開される予定の活動のひとつである。

日本桜を植樹するというプロジェクトを通して、多くの人を巻き込み、その結果地域を見つめる活動が展開されている。しかし場所の確保、資金の援助、生育のための技術の不足など多くの課題が残されている。またイベント等の華やかな事業ではなく、日々の継続にかかわる活動になると、関心を維持することが難しい現状に直面してなお、活動の発展のために尽力している人々もいた。Sさんは「桜があるかぎり絶対あきらめず、資金不足でも人手不足でも守っていきます」と決意を述べている。その背景には、桜を広めることで心が豊かになれるという思いがあり、それが地域への思いへとつながっている。そしてボランティアによる活動が、地域の活性化へとつながる「居住空間」の形成過程となっているのである。



#### 4. 桜植樹の背景にある女性の思い

ハワイ桜並木委員会のオアフ小委員会の女性委員であるSさんとNさんに対して、2017年8月に活動に対する意向と桜への思いを調査した。

Sさんは以前から、沖縄桜ではなく、開花期間は短いものの華やかに咲いてはかなく散っていく日本の桜を「戦争花嫁に見せたい」と考えてきた。結婚して日本を離れ生活してきたSさんは、それまで興味がなかったのに、美空ひばりのDVDを見て涙が止まらなくなった経験があるそうだ。そのとき、「私の中に住み続ける日本人のDNA」(Hawaii Pacific Press 2012/5/1)の存在を否定できなくなった。多くのものに日本の心を重ねてきたのだが、その一つが桜であった。小山博士のハワイへの桜の植樹の話聞いたとき、「夢をかなえてくれる素敵な花咲か爺さん、その人こそこの小山先生だ」(Hawaii Pacific Press 2012/5/1)と感動し、積極的に活動に参加していった。「桜は心に触れる花、日系の人も桜に触れていることで何か日本を感じると思う」とSさんは語る。そしてそれは「祖先や懐かしい気持ち」だという。桜をめぐる活動を通して、桜というものを「多くの人に感じてもらいたい」とさらに強く思うようになった。そしてそれが「自分も忠実に生きたい」、「自分の心に偽りなく生きたい」という想いにつながっていった。多くの日本人移住者が桜に思いをはせる状況のなかで、市民権を取りアメリカ人になったSさん自身にとっても、植樹のために展開している運動は、生きる土地として選んだハワイに日本の面影を求める活動なのである。

ハワイ桜並木委員会のオアフ小委員会委員長を務めているNさんは、調査に際して、まず日系人である夫がワシントンのポトマック川沿いの桜を見たエピソードを話してくれた。ワシントンの桜祭りでは、桜に糊のようなスプレーをかけ、花をもたせるというのである。笑い話のように話してくれたが、日系人の夫もハワイで桜を見ることができるとをうれしく思っているため、ともに花見をすることが楽しみとなっている。そして「桜は日本の代表であり、一本の木でもきれいだ、並木になるともっときれいだし喜ぶ人がいる」ので、この活動を通して桜で人を幸せにしたいと思っている。「桜を楽しみ、それで生きようとしている人もいた」と語り、桜が「生きることにもつながる」と桜の意義を確認していた。桜は「日本人にとってつながるもの」であり、人と人を、そして日本とアメリカをつなぐことができる、そして桜が植わることでその場所は変わるのだろうとNさんは考えている。そのため「ハワイで一番重要な場所」であるキャンプ・スミスに桜を「植えたのはとてもうれしい」し、「友好にふさわしい」とまとめてくれた。

Nさんは委員長として、Sさんは実働部隊として尽力しているため、Nさんは、Sさんのことを「扇のかなめ」であり「力を発揮できるように旗振りをやろうと思った」という。すなわち、Sさんが「動きやすいように」することが重要な役割であると語った。

一方、SさんはNさんのことを「旗そのもの」と言っている。人材を集め、いろいろな人と協力し、全体を見てまとめていくことが必要な活動のなかで、Nさんが果たしているのは代表としての役割そのものなのであろう。

桜は、ただの花ではなく「人を結び付け、文化をひっくるめて人を引き付ける力」(Sさん)を持っている。そのため、この活動を通して「人脈が広がって」おり、「人に希望、平和」を与える桜が「日本の文化を伝える糸口になる」とSさんはまとめた。日本人は「桜

とともに思い出を持って」おり、そうした思いを抱くことが他の人にも伝わり、「日本を知るきっかけになっている」と考えるのである。「美しさやもののあわれ」を多くの人に知ってもらいたいし、自分も知りたい。そのためにも「自分の心に嘘なく、ピュア」でいたいと抱負を語った。

桜のサポートをしているうちに人脈が広がったというSさんとNさんの活躍は、桜が人をつなげ、みんなで幸せになれるという願いから展開されているものである。仕事を抱えながらの活動への参加だが、委員会メンバーをまとめ、多くの人脈を広げながらの展開は、彼女たちの熱意と行動力が支えているものであった。

## 5. 終わりに：日本の象徴としての桜をめぐるオアフでの動き

ハワイにある桜の木は、アメリカによる植物規制の前から存在していた種類に限られてきた。しかし「桜寄贈100周年事業」を契機にセンダイヤ桜、オオシマザクラと日本桜の植樹の機会を得た。Nさんは「人種がいろいろいるんだから、桜もいろんな種類があってもいいんじゃない」といって、さらに陽光桜を移植しようとしている。ただし特別な状況下でない限り新たな種の輸入は容易ではない。また苗木を見て咲く木と咲かない木の見分けることはできず、見守る必要のある事業でもある。Sさんは「いつ咲くの？とあちこちで聞かれる」そうだ。満開になるまでには何十年とかかることもある活動であり、継続発展させることは課題となっている。また、植樹というイベントを終えた後は花が咲くまで話題性がなく、助成金を得ることも困難である状況は、斎藤（1980）が「桜が日本の心だの、民族性だのいっつも、桜の咲く季節にのみ関心を持ち、その他の時期には知らん顔を決め込むその姿勢に問題がある」と指摘する状況と重なる。人はイベントに心を動かし、その背景で支えているものには目を向けず、その結果、経過段階では人的にも金銭的にも課題を抱えることとなるのである。

一方で、「桜」という花をめぐる人々の関心を惹きつけ続けるために努力して活動している人たちがいた。今回調査した女性たちは、必ずしも植樹をはじめとする活動の表舞台にいるわけではなく、自分の信念のもとに下支えしてきた人たちである。女性の立場からのキャンプ・スミスへの植樹の依頼を、ハリスへの手紙につづっているように、彼女たちの人をつなぐ役割がハワイにおける桜の新たな局面を導き出してきた。日本において、桜が時代に応じて変化しつつも象徴ととらえられてきたように、場所を変えて、ハワイにおいても日本人・日系人の心を映すものとして、桜が意義を持つものとなっている。同時に桜を通して人をつなぎ、自分たちの地域を認識するなかで、活動の参加者だけでなく、地域の人々の「居住空間」の形成に寄与してきているのである。

## 付記

研究には科学研究費基盤研究(C)研究課題/領域番号26370935代表影山穂波の一部を使用した。

注

- 1) ハワイ報知新聞は、1912年に創業し、日系人に影響を及ぼし続けた新聞である。現在は日本語と英語で構成される日刊紙である。

参考文献

- Koyama (2013) The Introduction of Japanese Flowering Cherries in Hawaii. *Journal of North American Japanese Garden Association*, vol.1. p. 46-47.
- 大貫恵美子 (2003) 『ねじ曲げられた桜』岩波書店
- 影山穂波 (2010a) ハワイにおけるネットワーク形成と女性の役割. *お茶の水地理* 50. 80-91.
- 影山穂波 (2010b) ハワイにおける戦後移住の女性たち～連載「がんばるハワイの新一世」から～. *椋山女学園大学研究論集* 41. 143-152.
- 斎藤正二 (1980) 『日本人とサクラ―新しい自然美を求めて―』講談社
- 佐佐木信綱校訂 (1929) 『新古今和歌集』岩波書店
- 品川実 (1994) 『桜―日本人の心の花・桜はなぜ人に愛されるのか』実業之日本社
- 高木博志 (2006) 『近代天皇制と古都』岩波書店
- 丸谷馨 (2010) 『日本一の桜』講談社現代新書
- 高知新聞 2016/12/22
- 牧野植物園 (2013) 『牧野植物園だより』 No.55
- Hawaii Pacific Press 2011/12/1
- Hawaii Pacific Press. 2012/5/1
- Hawaii Pacific Press 2016/12/1
- The Hawaii Houch 2016/11/18
- North Hawaii News 2012/2/2
- Cherry Blossom Festival <http://cbfhawaii.com> (2017年9月11日)